

# 有部系アビダルマにおける 「有漏の忍」と「世間的な正見」

——『ウダーナヴァルガ・ヴィヴァラナ』の解釈から——

田 中 裕 成

## 1. はじめに

筆者は、有部における修行体系形成の解明を目的として、AKBhを中心に研究を行っている。その中でも順決択分（煖・頂・忍・世第一法の四善根位）は阿含經典に説かれる階位ではなく、有部が自ら作り上げた階位である。ゆえに、この階位を精査することによって、有部がどのような目的意識を持って修行体系を構築していったのかが明らかになると考えている。

有部の修行体系が四諦の観察を中心とするのは言うまでもないが、その際に働く慧（*prajñā*）は、時に「忍（*kṣānti*）」とも呼ばれる。この忍は大別すると順決択分等と関係する「有漏の忍<sup>1)</sup>」と、聖諦現觀に伴って登場する「無漏の忍」との二種類である。このうち、「無漏の忍」については櫻部〔1997, pp. 54-59〕<sup>2)</sup>の研究によって「推度（*saṃtiraṇa*）をその本性とするものである」

1) 有部において「忍」の語は慧の呼称として用いられる他に、修行段階を示す語として、順決択分の第三位にも用いられる。これらは共通項こそあるものの、別の概念である。ゆえに、本稿では混乱を防ぐために、次ように両者を区別して用いる。「有漏の忍」とする際には有漏の慧の働きの一面として呼称される「忍」を指すものとする。また、「忍位」とする際には順決択分の第三位を指すものとする。

また、AKBhでは「有漏の見」として、善性を有する「世間的な正見」と、不善性を有する「五見」の六種が想定されている（Cf. 註17; AKBh 391, 13-14）。ゆえに「有漏の忍」にも善性のものと不善性のものが存在すると考えられる。本稿では主に、順決択分等と関連する「善性の有漏の忍」について検討する。以下、特に限定を行わずに「有漏の忍」と述べる際は、いずれも「善性の有漏の忍」を指すものとする。

2) 櫻部〔1997, pp. 54-59〕は佐々木〔1958b, pp. 580-593〕の研究に端を発したものである。佐々木〔1958b, pp. 580-593〕は、*kṣānti* は  $\sqrt{kṣam}$  (be able to, to bear) を起源とする

ということが明らかとなっている。他方、「有漏の忍」については宮下 [1983] を始めとする幾人かの研究<sup>3)</sup>によって AKBh を中心に整理が行われているが、その内実が明瞭になったとは言いがたい現状である。

そこで、本稿では、まず、AKBh 等の有部論書における忍の記述を整理し、忍が有漏と無漏に区別されることを確認する。その上で、有部系アビダルマにおける「有漏の忍」の内実を明らかにすることを目的として、チベット訳にのみ伝わる『ウダーナヴァルガ』(以下、UV) の註釈書『ウダーナヴァルガ・ヴィヴァラナ』(以下 UVV) における「世間的な正見 (laukikī samyag-drṣṭiḥ)」の解釈を糸口に、検討を行う。そして、UVV における詳細な「有漏の忍」に対する解釈が AKBh にも援用できる可能性を探りたい。

この研究は順決択分と信の関係、延いては有部修行体系における信の在り方を見出す足がかりとなることを期待したものである。

## 2. 有部論書における「有漏の忍」の内実

これまでの研究において「有漏の忍」の内実が不鮮明であるのは、AKBh

が、パーリ語の梵語化に際して *√kam* (to like, to desire) 起源の *khanti* 対応の梵語も *kānti* と梵語化されずに *kṣānti* と梵語化されてしまい、結果として *kṣānti* は to bear と to desire の二種の語根の意を含む単語となり、「無生法忍」の忍は *√kam* に由来すると指摘する。

これに対して櫻部 [1997, pp. 54-59] は AKBh の「智品」において *kṣānti* が *saṃtīraṇa* (推度) と言い換えられ、AKVy においては *upanidhyāna* (審慮) と言い換えられていることを指摘する。そして、それはパーリ語に見られる *dharmānījḥānakkhanti* などに用いられる *nījḥāna* と同義であり、古来より *kṣānti* は知的な作用を言い表す単語であったと指摘する (なお、初出は櫻部 [1966] であり、櫻部 [1975] として整理され、それを一部訂正したものが櫻部 [1997] である)。また周 [2009, pp. 119-132] は両者の意見をふまえた上で、「推度」の作用の一部として「意楽」が有り、審慮 (*upanidhyāna*) は「意楽」をふくむと述べる (また、周 [2009, p. 56 註56] も参照のこと)

他にも、「無漏の忍」について櫻部 [1997] と同一の見解が AKBh 「智品」及び AKVy の翻訳研究である櫻部・小谷・本庄 [2004, xiv] や、TA の翻訳研究である宮下 [1985] によっても述べられている。

- 3) 「有漏の忍」の特徴を分析した研究として 宮下 [1983]、平澤 [1985] 等が存在する。しかしいずれの研究によっても「有漏の忍」の特徴が明瞭になったとは言いがたい。宮下 [1983] は TA 「智品」冒頭部の翻訳研究である。その際に見と智を図表を用いて分析し、有漏の忍は智であるが見でないとの結論を下す。平澤 [1985] は漢訳アビダルマ文献を中心に有漏の忍と無漏の忍の整理を試みた研究であり、有漏と無漏の忍には依地を六地とするなどの共通点があると指摘する。

等の有部論書において、「有漏の忍」が明確に規定、言及されていないことに起因しよう。このうち、AKBhでは、「有漏の忍」は主に「賢聖品」と「智品」の二箇所において言及される。そこで本章では、AKBhの記述を中心に、有部論書における「有漏の忍」についての記述を整理したい。

## 2.1. AKBh「賢聖品」を中心とした規定

第一に、「有漏の忍」はAKBh「賢聖品」において「忍得すること (kṣamaṇa)」として、言及される。そこでは、順決択分の「忍位」が「忍」と名づけられる理由として「退かず、優れて、諦を忍得すること (kṣamaṇa) から〔忍 (kṣānti) である〕。」<sup>4)</sup>と説示される。この説示は忍 (kṣānti) の語に、√kṣamの原意である「耐える」との意味と、四諦を観察する際の作用に関する意味の二義が有ることを示すものである。しかしながら、後者の義の「忍得すること」の意味内容は説明されない。ただ、この点についてAKVyでは「忍得する (kṣamate)、〔すなわち、〕欲楽する (rocate)」<sup>5)</sup>と註釈する。し

4) AKBh 344, 8-10

mṛdumadhyādhimātrakramābhivṛddhebhyaḥ punar utpadyate

**tebhyaḥ kṣāntiḥ** (18c)

adhimātrasatyakṣamaṇād<sup>(1)</sup> aparihāṇitaḥ | sã 'pi triprakārā mṛdvī madhyā'dhimātrā ca |

さらに、下〔品〕中〔品〕上〔品〕の順序で増大した

それら〔頂善根〕から忍〔善根〕が (18c)

生じる。〔忍善根を得た衆生は、その階位から〕退かず、優れて（上品に）諦を忍得することから〔忍善根が生じる〕。また、そ〔の忍〕も下〔品〕中〔品〕上〔品〕の三種である。

(1) 櫻部・小谷 [1998, p. 126] に従い adhimatrasya は adhimātrasatyā- に訂正。

5) AKVy 533, 3-5

adhimātrasatyakṣamaṇād iti | uṣmagatāvasthāyāṃ mṛdu satyaṃ kṣamate rocate | mūrdhāvasthāyāṃ madhyaṃ | tadanāṃtaram idānim *adhimātra-satyakṣamaṇāt* kṣāntir utpadyate |

「優れて、諦を忍得することから」とは、煖の階位においては諦を鈍く（下品に）忍得する、〔すなわち、〕欲楽する。頂の階位においては中くらいに（中品に）〔諦を忍得する、すなわち、欲楽する〕。その直後に、今度は、優れて（上品に）、諦を忍得することから忍〔善根〕が生じる。

また、TA [P. 360b1, D. 214a2] LA [P. 201b3, D. 163b6] は、AKVyとは対応せず、kṣāntiの語が示す意味に直接的に言及しない。

かし、それ以上の言及は行われず、ここでの「欲楽」が何を意図しているのか、「忍得すること」とは何なのか。「有漏の忍」の内実是不鮮明なままである<sup>6)</sup>。

このAKBhの記述の対応句は『雑阿毘曇心論』等の有部論書に確認される<sup>7)</sup>。しかし、いずれにおいても簡潔な説示である。ただ、そこではAKVyに見られたように「欲楽」を「忍」と関連付ける傾向が見受けられる。たとえば、『雑阿毘曇心論』においては「忍とは四聖諦に対する堪忍・欲楽である」と二義をもって規定する<sup>8)</sup>。そして、ここでの堪忍は不墮惡趣性や不退善根性であると説明される<sup>9)</sup>。これに対して『阿毘曇心論經』では、「堪忍」についての言及はないものの<sup>10)</sup>、「四諦の行相に対する樂欲を増上するので忍である<sup>11)</sup>」と説明する。則ち、これらの説示はAKBhと同様に、忍(kṣānti)に、√kṣamの原意である「耐える」との意味と、四諦を觀察する際の作用に関する「欲楽」の意味との二義が有ることを示すものである<sup>12)</sup>。

6) この点について、櫻部[1997, p. 39 註2]は次のように言及している。「ヤショーミトラ疏(荻原本 p. 533, l. 4)ではkṣamateの語をrocateで説明している。その場合のrocateは「〔智をもって正しく〕照見する」の意であると思われる。この定義の中のruciがそれにつながると思えば、adhimuktiはやはり「印可決定」とか「令心明了」とか説明されるような知的なはたらきに関わることになる。」

7) 順決択分の忍位における忍の語の意味については、『阿毘曇甘露味論』[T.28.973a12]、『阿毘曇心論經』[T.28.849b13]、『雑阿毘曇心論』[T.28.909c23]、『順正理論』[T.29.678c4-9]に類似する記述があり、直接関連する記述ではないものの『大毘婆沙論』[T.27.626a4-7]にも対応する解釈が認められる。しかしいずれにおいても忍の内実を明瞭に説明するものではない。また、『アビダルマディーパ』においては忍について言及されると考えられるFolio 127が欠損している(Cf. 三友[2007, p. 664 註22])。

8) 『雑阿毘曇心論』[T.28.909c23] 忍者於四聖諦堪忍欲樂。

9) 『雑阿毘曇心論』[T.28.909c23] 煖頂亦堪忍者不然。忍不退故。違惡趣故。

10) 『阿毘曇心論經』においては「耐える」という意味については註釈されない。これは忍の不墮惡趣性が有部論書において登場するのが『雑阿毘曇心論』や『阿毘曇毘婆沙論』以後であるからと考えられる。忍位の「不墮惡趣性」については註の40を参照。

11) 『阿毘曇心論經』[T.28.849b13] 問曰。忍有何義。答曰。彼於四諦無常等行。樂欲增長是故名忍。是故說順諦忍。能除四諦增上愚。暖頂能除四諦下中愚。

12) また、無漏の忍についての言及ではあるものの、『阿毘曇心論經』では「苦法忍」の忍の語義を述べる際に『阿毘曇心論』において「堪任(\*kṣānti)」とするところを、「知ろうとすること、〔知ろうと〕願うこと(欲知樂)」として、意味する所をより明白に述べる。『阿毘曇心論』[T.28.818c12]

生無漏法忍名苦法忍。彼未曾觀今觀時堪任故曰忍。是謂初無漏無礙道。

無漏の法忍が生じる、〔これを〕苦法忍と名付ける。こ〔の苦法忍〕は未だ見たことの無い〔法〕を、今〔初めて〕見る時、〔その法を〕堪任(\*kṣānti)するゆえに、

このように AKBh 等の有部論書において、「有漏の忍」は「欲楽」と密接な関係をもって説明される<sup>13)</sup>。しかし、いずれにおいても簡潔な説明に過ぎず、ここでの「欲楽」が何を意図しているのか、また、「有漏の忍」にはどのような働きがあるのか、その内実は不鮮明なままである。

## 2.2. AKBh 「智品」を中心とした規定

第二に、「有漏の忍」は、AKBh 「智品」においては「賢聖品」よりいくらか詳細に言及される。そこでは、慧 (prajñā; 法の選別<sup>14)</sup>) には見 (dr̥ṣṭi; 推測性<sup>15)</sup>) と智 (jñāna; 決定性<sup>16)</sup>) の二種類の性質があると述べ、それらを用い

---

忍という。こ〔の苦法忍〕は、最初の無漏の無間道 (\*ānantaryamārga) である。  
『阿毘曇心論經』[T.28.849c6]

欲界見苦斷十使對治名苦法忍。昔所未見法欲知樂名忍。此最初無漏無礙道。

欲界の見苦所斷の十使の對治を苦法忍と名付ける。過去に、未だ見たことの無い法を知ること(解脫道としての智)を求め、願うことを、忍と名付ける。こ〔の苦法忍〕は最初の無漏の無間道である。

このことから「有漏の忍」だけが「欲楽」と関係するのではなく、「忍」そのものが「欲楽」と関係すると言えよう。

- 13) この結果は kṣānti に -kam 的な意味も含まれていると推測した 佐々木 [1958b, pp. 580-593] の見解 (Cf. 註 2) とも対応する。ゆえに、kṣānti の語義は今回得られた成果を踏まえ、今一度、検討する必要があるであろう。

- 14) 慧は AKBh では十大地法の一つとして数えられ、「法の選別」と規定される。

AKBh 54, 22 (Cf. 櫻部 [1969, p. 282])

matiḥ prajñā dharmapracicayaḥ |

〔偈中の〕慧 (mati) とは、慧 (prajñā) であり、法の選別である。

- 15) 見が推測性であることは、すでに櫻部 [1997, pp. 54-59] (Cf. 註 2) が AKBh の記述 (Cf. 註 17) と当該箇所 AKVy の記述に基づいて指摘している。また、AKBh 58, 8 において「見」が大善地法に含まれない理由として、「見は特殊な慧である」と述べる際に、AKVy 134, 2 は「見」とは「推測を有する慧 (saṃtirikā prajñā)」であると註釈する。また、『順正理論』[T.29.735b7]においても「見者推度性故」と説明する。

- 16) 智が決定性であることは、AKBh では直接的に言及されない。しかし AKVy では「決定した (niścita)」のものであるとして次のように述べられる。

AKVy 611, 20-21

niścitaṃ ca jñānaṃ iṣyate | nāniścitaṃ | iti na kṣāntayo jñānaṃ |

また、智は決定されたものと〔宗義として〕認められるのであって、決定されていないもの〔と認められるの〕ではない。ゆえに〔無漏の八〕忍は智ではない。

また、『順正理論』においても全く同様に規定される。

『順正理論』[T.29.735b3]

所以者何。非決斷性故。唯決斷義是智義故。

て区別を行う<sup>17)</sup>。その内容は櫻部・小谷・本庄 [2004, xiv] によると次頁図の通りである。

ここではまず、「無漏の忍（八忍）」は智ではなく見のみである<sup>18)</sup>と直接的に規定される。

			見	智
慧	無漏	八忍	○	×
		尽智・無生智	×	○
		その他	○	○
	有漏	五見・世間正見	○	○
		その他	×	○

17) AKBh 391, 2-15 (Cf. 櫻部・小谷・本庄 [2004, pp. 1-7])

kṣāntayaś cocyante jñānāni ca samyagdr̥ṣṭiḥ samyagjñānaṃ ca | kiṃ punaḥ  
kṣāntayo na jñānaṃ samyagjñānaṃ ca na samyagdr̥ṣṭiḥ<sup>(1)</sup> |

**nāmalā kṣāntayo jñānaṃ (1a)**

taṭpraheyasya vicikitsānuśāsyāpārahiṇatvāt | dr̥ṣṭayas tu tā santiraṇātma-  
katvāt yathā ca kṣāntayo dr̥ṣṭir na jñānaṃ evaṃ punaḥ

**kṣayānutpādadhīr na dr̥k (1b) |**

kṣayajñānaṃ anutpādajñānaṃ ca na dr̥ṣṭir asantiraṇāparimārgaṇāśayatvāt |  
**tadanyobhayathāryā dhīḥ (1c)**

kṣāntikṣayānutpādajñānebhyaḥ 'nyā 'nāsravā prajñā dr̥ṣṭiḥ jñānaṃ ca |

**anyā jñānaṃ (1d)**

laukikī prajñā sarvaiva jñānaṃ |

**dr̥śaś ca śaṭ || (1d) ||**

pañca dr̥ṣṭayo laukikī ca samyagdr̥ṣṭiḥ | eṣā ṣaḍvidhā laukikī prajñā dr̥ṣṭiḥ  
anyā na dr̥ṣṭiḥ | jñānaṃ tv eṣā cānyā ca |

さて、〔先に、八〕忍と〔八〕智とが説かれ、正見と正智が〔説かれた〕。では、  
〔八〕忍は智ではないのか。また、正智は正見でないのか。

**無垢（無漏）の〔八〕忍は智でない (1a)。**

それら〔八忍〕によって断ぜられるべき疑随眠が未だに断ぜられていないからである。一方、それら〔八忍〕は推度を本性とするゆえに見である。また、諸々の  
〔八〕忍が見であり、智でないのと同じように、また、

**尽〔慧〕と不生慧は見ではない (1b)。**

尽智と無生智とは、推度することがなく、追求しようとする意欲がないゆえに、見ではない。

**それらとは異なる聖なる慧は兩様である (1c)。**

〔八〕忍と尽〔智〕・無生智の他の無漏の慧は、〔すでに自らの疑を断じており、推度を本性とするゆえに、〕<sup>(2)</sup>見であり、智でもある。

**〔上述の無漏の慧の〕他は智である (1d)。**

世間的な（有漏の）全ての慧は智である。

**さらに、〔有漏の慧のうち〕六つは見である (1d)。**

〔六つとは、〕五見と、世間的な正見である。これら六種の世間的な慧は見であり、他は見ではない。いっぽう、これら〔六種〕と、それ以外〔の有漏の慧〕はまた、智でもある。

(1) dr̥ṣṭiḥ は櫻部・小谷・本庄 [2004, p. 5 註 1] に従い samyagdr̥ṣṭiḥ に修正。

(2) 〔すでに自らの疑を断じており、推度を本性とするゆえに、〕は玄奘訳『俱舍論』[T.29.134b27]「所餘皆通智見二性。已斷自疑推度性故。」に従い補う。

18) Cf. 註17; AKBh 391, 4-5

これに対して AKBh は「有漏の忍」に関して、名称を直接挙げて、言及することはない。しかし、「世間的な全ての慧は智である<sup>19)</sup>」との規定は存在する。そして、

	見	智
無漏の忍	○	×
有漏の忍	?	○

四善根の自性に関しては、AKBh 「賢聖品」に「四善根は慧を本性とするものである<sup>20)</sup>」との規定が存在する。ゆえに「有漏の忍」は必ず智であると見なせよう<sup>21)</sup>。

このように、「有漏の忍」と「無漏の忍」は「智」の性質の有無において明確な性質の違いをみせている。整理すれば右図の通りである。

では「有漏の忍」には「見」の性質が有るのであろうか。AKBh 「智品」では「見」については「〔有漏慧のうち〕五見と世間的な正見の六つの世間的な慧は見である<sup>22)</sup>」と規定される。しかし、「世間的な正見」は AKBh 「界品」において「世間的な正見 (laukikī samyagdr̥ṣṭiḥ) は意識と相応する善

19) Cf. 註17；AKBh 391, 11-12

20) AKBh 345, 2-15 (Cf. 櫻部・小谷 [1999, p. 128])

ta eta ūsmagatādayaḥ smṛtyupasthānasvabhāvatvāt prajñātmakā ucyante |  
**sarve tu pañcaskandhāḥ (19cd)**

saparivāragrahaṇāt |

**vināptibhiḥ || (19d) ||**

prāptayo noṣmagatādibhiḥ saṃgr̥hyante | mābhūd āryasya tatsaṃmukhī-  
bhāvād ūsmagatādināṃ saṃmukhibhāva itī |

これらの煖等〔の四善根〕は、〔法〕念住を自性とするゆえに、慧を本性とするものと言われる。

しかし、〔それら四善根〕全ては五蘊でもある。(19cd)

随伴〔する法〕を含むからである。

**得を除く。(19d)**

〔すなわち、〕得は煖法などによって含まれない。そ〔の得〕が現前するゆえに、聖者に煖法等が現前することがあってはならないからである。

21) 「有漏の忍」という語が AKBh に登場することはない。しかしながら、「無漏の忍」が AKBh で言及された際 (Cf. 註17) に AKVy は「有漏の忍」が想定されるから、それを除くことを目的として「無漏」と限定している旨を説明する。

AKVy 611, 16-18

**nāmalāḥ kṣāntayo jñānam (1a)**

itī | amalā eva kṣāntayo na jñānam ity avadhāraṇāt sāsravāḥ kṣāntayo jñānam  
ity uktaṃ bhavati | saṃvṛtijñānaṃ hi tad iṣyate |

「無垢の〔八〕忍は智ではない。(1a)」

とは、諸々の無垢の〔八〕忍だけが智ではないと限定するゆえに、有漏の諸々の忍は智であると説かれたことになる。何故ならそ〔の有漏の智〕は世俗智と認められるからである。

22) Cf. 註17；AKBh 391, 13-14



なる有漏の慧である<sup>23)</sup>」と規定されるに留まり、「有漏の忍」と世間的な正見の関係は不明瞭なままである。

このことから、宮下 [1985] は、世間的な正見に「有漏の忍」は含まれないものと見做し、智のみであると規定している。また、櫻部・小谷・本庄 [2004] は「有漏の忍」について言及を行っていない<sup>24)</sup>。

AKBh「智品」の記述はいくつかの有部の論書に対応する。しかし、そのほとんどは先の AKBh の記述を出ないものである<sup>25)</sup>。その中、AKBh においていささか不明瞭であった世間正見とされる「意識と相応する善なる有漏の慧」について『大毘婆沙論』は言及を行う。そこでは、その慧には加行得・離染得・生得の三種類があるとした上で、加行得に関して「四善根等と俱生する慧」を挙げる<sup>26)</sup>。この記述に基づくのであれば、順決択分における「有漏の忍」は世間正見であり、「有漏の忍」は「見」であるとも言えるであろう。

以上、AKBh「智品」の記述を中心に「有漏の忍」の取り扱いを整理した。その結果、少なくとも AKBh の記述から「智」の性質の有無という点で「有

23) AKBh 29, 18 (Cf. 櫻部 [1969, pp. 217-218])

laukiki punaḥ samyagdr̥ṣṭīr manovijñānasamprayuktā kuśalasāsravā prajñā |  
また、世間的な正見は意識と相応する善なる有漏の慧である。

24) 「有漏の忍」については言及を行わないものの、世間的な正見に関しては、櫻部・小谷・本庄 [2004, p.6 註6] において、AKBh 39, 18 が行う世間的な正見の規定と、『決定義経』(Cf. 本庄 [1989, p. 26]) における世間的な正見の定義等を紹介する。

25) AKBh「智品」に見られるような慧に関する忍・智と見・智の整理は『阿毘曇心論』系論書には認められない。いっぽう、『衆事分阿毘曇論』[T.26.648c5-c30] や、『入阿毘達磨論』(Cf. 櫻部 [1997, pp. 221-225])、『順正理論』[T.29.735a25-c3]、『大毘婆沙論』九十五卷より百卷 (Cf. 註26) に、対応が認められる。しかし『大毘婆沙論』以外の記述は上述の AKBh の説明を超えるものではない。ゆえに、本稿ではそれぞれを一々紹介せず、『大毘婆沙論』の紹介に留める。

26) 『大毘婆沙論』[T.27.502a17-25] (Cf. 『大毘婆沙論』[T.27.490a14-15]、『阿毘曇毘婆沙論』[T.28.360a18-361b27])

云何世俗正見。答意識相應有漏善慧。此有三種。一。加行得。二。離染得。三。生得。加行得者。謂聞所成慧。思所成慧。修所成慧。此中差別有不淨觀持息念等。及諸念住。并煖頂忍世第一法等俱生慧。離染得者。謂靜慮無量無色解脫。勝處遍處等俱生慧。生得者。謂生彼地所得善慧。諸如是等世俗正見。差別無邊如四大海水滯無量。今於此中略說僞顯世俗正見。



漏の忍」と「無漏の忍」は別異であることが明らかとなる。さらに、『大毘婆沙論』の記述が援用できるのであれば、「有漏の忍」は「世間的な正見」であり、「見」の性質に関しては「有漏の忍」と「無漏の忍」が共通する可能性が窺える。

## 2.3. 小結

以上、有部論書における「有漏の忍」に関する言及を整理した。要点をまとめれば次の四点である。

1. AKBh 等の有部論書において、「有漏の忍」は「欲楽 (√ruc)」と密接な関係をもって説明される。
2. AKBh において「有漏の忍」は「智」の性質を有するという点で、「無漏の忍」と異なるものとして説明される。
3. 『大毘婆沙論』の記述を援用すれば「有漏の忍」は「世間的な正見」であり「見」である。
4. 有部論書において「有漏の忍」については断片的な情報しか存在せず、その内実とは明確に記述されない。

## 3. UVV における「有漏の忍」の規定

UVV はプラジュニャーヴァルマン<sup>27)</sup>が著したとされる有部所属<sup>28)</sup>と推定さ

27) このプラジュニャーヴァルマンという人物については、Balk [2011, pp. 185-186] はジナミトラと同一世代に、チベットにおいて翻訳官として活躍した人物であると推定する。それに対して、Skilling [1997, pp. 215-219] はプラジュニャーヴァルマンの三種の著作 (*Udānavargavivaraṇa*, *Viśeṣastavaṭīkā*, *Devātiśayastotraṭīkā*) がいずれも11世紀以後の翻訳である点や、翻訳官プラジュニャーヴァルマンが大乗仏教の専門家であったのに対して、プラジュニャーヴァルマンが著したとされる著作は瑜伽師や唯識家の思想から仏教外の思想まで幅広く扱うものとして大きな差異が見られる点等の根拠を挙げ、翻訳官プラジュニャーヴァルマンと執筆者プラジュニャーヴァルマンが別人である可能性を指摘している。本稿ではこの Skilling [1997, pp. 215-219] の見解に随い、UVV は執筆者プラジュニャーヴァルマンの著作であるとみなす。

28) Balk [2011] や榎本 [2004, p. 656] は UVV のコロフォンに基づいてプラジュニャーヴァルマン (Prajñāvarman [प्राज्ञवर्मन]) が説一切有部の人物であることをすでに指摘している。また、Balk [2011, p. 199] はプラジュニャーヴァルマンが法救による UV の製作過程に対する毘婆沙師の見解に対して批判的な態度をとっていることを指摘している。

れる UV の註釈書である。本書の内容に関して Balk [1984a, b, 2011] 以来、あまり研究が進展しているとは言えない。そのような中、筆者は問題の「有漏の忍」に対する解釈が UVV において提示されていることを発見した。そして、その解釈は先の検討で扱った情報より詳しいものであった。そこで、今からそれを紹介したい。当該箇所は次のような UV iv-8, 9 に対する註釈箇所である。

まず、当該箇所で注釈される UV の本文を挙げる。

UV iv-8-9 (Cf. 中村 [1978, p. 178], Bernhard [1965, p. 128])

hīnām dharmām na seveta pramādena na saṃvaset |

mithyādr̥ṣṭīm na roceta na bhavel lokavardhanaḥ ||iv-8||<sup>29)</sup>

samyagdr̥ṣṭīr adhimātrā<sup>30)</sup> laukikī yasya vidyate |

api jātisahasrāṇi nāsau gacchati durgatim ||iv-9||<sup>31)</sup>

29) UV iv-8の並行句は非常に多岐に渡る (Cf. Bernhard [1965, p. 128])。今回、主題となるのは UV iv-9 であるために、UV iv-8 に関しては割愛する。

30) 正式な語形は adhimātrā である。Bernhard [1965, p. 128] の紹介する異読にも adhimātrā とする語形が存在し、『瑜伽師地論』においても adhimātrā である、(Cf. 註65)。しかし、当偈は śloka 調の韻律であり、pathyā の形において、第六音節は長音が求められる。また、パラレルが存在する梵文『増一阿含』[pp. 156-158] においても adhimātrā であった。ゆえに本稿では、Bernhard [1965, p. 128] の校訂に従い adhimātrā を採用した。

31) UV iv-9 は Bernhard [1965, p. 128] によって指摘されているようにダンマパダ等の南伝系資料において一切のパラレルが発見されていない。しかし北伝系の資料においては『雑阿含』[T.2.204b09]、梵文『増一阿含』[pp. 156-158] に登場することを始め、四世紀の写本と考えられるスバシ写本 (Cf. Nakatani [1987, p. 19]) に登場し、『法句経』[T.4.559b21]、『出曜経』[T.4.639b28]、『法句譬喻経』[T.4.577a15] や『法集要集経』[T.4.779a18] にも登場する。このことから南伝ではみられないものの北伝系の資料には数多く登場することが確認される (Cf. 水野 [1981, p. 402], 榎本 [2001a, p. 283])。また、『大毘婆沙論』[T.27.501c25] において引用が見られるが、対応する『阿毘曇毘婆沙論』等には引用は確認されなかった。他にも『声聞地』第一瑜伽処等 (Cf. 註66) にも引用は確認される。

また、漢訳については次の通りである。

『雑阿含』[T.2.204b9]	假使有世間 正見增上者	雖復百千生 終不墮惡趣
『法句経』[T.4.559b21]	正見學務增 是爲世間明	所生福千倍 終不墮惡道
『出曜経』[T.4.639b28]	正見增上道 世俗智所察	更於百千生 終不墮惡道
『法句譬喻経』[T.4.577a15]	正見學務增 是爲世間明	所生福千倍 終不墮惡道
『法集要集経』[T.4.779a18]	正見增上道 世俗智所察	歷於百千生 終不墮地獄
『大毘婆沙論』[T.27.501c25]	若成就增上 世俗正見者	設經百千生 終不墮惡趣
『坐禪三昧経』[T.15.280a9]	世界正見上 誰有得多者	乃至千萬歳 終不墮惡道
『成実論』[T.32.360c20]	得世上正見 雖往來生死	乃至百千世 常不墮惡道
『成実論』[T.32.307b19]	若人得世間上正見。雖往來生死乃至百千歳終不墮惡道 <sup>(1)</sup> 。	

諸々の劣った法に依存するな、放逸と共に過ごすな、

邪見を望むな。世間を長養する者であってはならない。||iv-8||

ある人に世間的な優れた正見が有れば、

その人は千度生まれ変わろうとも、悪趣に赴かない。||iv-9||

UVV はこのうち UV iv-9 に基づいて順決択分の忍位を説明する。以下が当該箇所<sup>32)</sup>の註釈である<sup>33)</sup>。

UVV [P. 143b3; D. 125a2] (cf. Balk [1984a, pp. 247, 2-250, 24]<sup>33)</sup>)

[P. 143b3; D. 125a2] བག་ཡོད་པ་ནི་ཡོན་ཏན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གནས་ཡིན་པས་གང་སྤང་བའི་དངོས་པོ་དེ་བསྐྱེད་པའི་ཕྱིར། དམན་པའི་  
ཆོས་ལ་མི་རྟོན་ཅིང། །ཞེས་བྱ་བ་ལ་སོགས་པའི་ཆོག་སྤྱོད་པ་གཉིས་སྟོས་སོ། །འདིའི་གྲོང་གཞི་ནི་ལོག་པའི་ལྷ་བ་མཆོག་ཏུ་ལ་ན་མ་ཐོབ་  
པ་<sup>34)</sup>ལ་ལོག་པར་ལྷ་བའི་སྐྱེས་བུ་གང་ཟག་གང་ཡང་ལུས་ཀྱི་ལས་ལ་དེ་ལྟར་ལྷ་བ་ཞེས་བྱ་བ་ལ་སོགས་པ་ཁྱེར་ཆོག་སྤྱོད་པ་གཉིས་  
གསུངས་སོ། ། <……以下略<sup>35)</sup>……>

[P. 144b5; D. 125b5]གང་སྤང་བའདད་པའི། ལོག་པར་ལྷ་བ་ལ་འདོད་མེད་དང། །ཞེས་བྱ་བ་དེ་དང་པོར་གང་གིས་སེལ་བ་ཡིན་ཞེ་ན།  
འཇིག་རྟེན་པའི་ཡང་དག་པའི་ལྷ་བས་ཡིན་ཏེ། དེས་ན་དེ་ཉིད་བསྐྱེད་པའི་ཕྱིར་སྟོས་པ། འཇིག་རྟེན་པ་ཡི་ཡང་དག་ལྷ། །ཞེས་བྱ་བ་ལ་སོགས་པ་  
སྟོས་ཏེ། རེ་ཞིག་འཇིག་རྟེན་པའི་ཡང་དག་པའི་ལྷ་བ་ཡང་མཐུ་འདི་ལྷ་བུ་ཡོད་དེ། འདི་ལྟར་རན་སོང་གསུམ་དུ་ལྷང་བ་འགོག་པར་བྱེད་པ་ཡིན་ན།  
འཇིག་རྟེན་ལས་འདས་པ་ལྷ་སྟོས་ཀྱང་ཅི་དགོས་སོ་ཞེས་པན་ཡོན་བསྐྱེད་པ་ནི་འདིའི་བསྐྱེད་པའི་དོན་ཏེ། །

【B】 ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་ལ་འཇུག་པའི་ལྷ་བ་ནི་ཡང་དག་པའི་ལྷ་བ་སྟེ། གང་སོ་སོའི་སྟེ་བའི་དགེ་བ་གང་མཐོང་བའི་དབང་གིས་ 【B-1】 ལས་  
དང། འབྲས་བུ་ཡོད་པ་ཉིད་ལས་བརྒྱམས་ཏེ། དཀོན་མཆོག་གསུམ་དང་བདེན་པ་རྣམས་ལ་ཡིད་ཆེས་ཤིང། 【B-2】 མོས་པ་དང་འདོད་པའོ། །

[D. 126a]ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་ཤས་ཆེ་བ་དང་ལྷན་པ་སྟེ། [P. 145a]མདོར་ན་ཁྱད་པར་གྱི་གནས་སྐབས་ཐོབ་པའི་དོན་ཏེ། དེའི་ཕྱིར་དོ་བར་  
ཐུབ་པ་ཡང་དག་པར་འཛིན་པ་ནི་ཐམས་ཅད། །ཅེ་མོ་ཡང་དག་པར་འཛིན་པ་ནི་བར་མའོ། །བཟོད་པ་ཡང་དག་པར་འཛིན་པ་ནི་ཆེན་པོའོ། །འཇིག་རྟེན་

『摂大乘論釈』[T.31.395a22] 諸有成世間 上品正見者 雖經歷千生 而不墮惡趣

『瑜伽師地論』[T.30.401a14] 若有世間 上品正見 雖歷千生 不墮惡趣

(1) 当該の『成実論』[T.32.307b19] のみ散文である。

32) 本箇所に対して UVV の研究である Balk [2011] は翻訳やコメントをつけていない。

33) UVV 本文については紙面の関係上、修正箇所のみ挙げた。異説に関しては Balk [1984a, pp. 247, 2 - 250, 24] を参照。

34) AKBh 264, 10, AKUp [P. Tu28, 3b2 ; D. Ñu24, 8b2] に従い、<sup>35)</sup>ལ་ན་མ་ཐོབ་པ་ལ་ལོག་པར་ལྷ་བ་འདོད་པ་ལ་སོགས་པ་ཁྱེར་ཆོག་སྤྱོད་པ་གཉིས་གསུངས་སོ། ། に修正。

35) 紙面の関係上、UV iv-8 の註釈箇所 Balk [1984a, pp. 247, 11-249, 10] は省略した。

པ་ཉིད་ཡིན་པས་འཇིག་རྟེན་པོ་སྟེ་ཟག་པ་དང་བཅས་པའོ། །【A】གང་གི་གནས་སྐབས་ཀྱིས་འཇིག་རྟེན་པའི་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བ་ཆེན་པོ་ཡིན་  
 ཞེ་ན། སྤྲུལ་པ། འདི་ལྟ་སྟེ་སོ་སོའི་སྐྱོ་བ་ལྟར་ལྟ་བུ་འདི་ལ་འཕགས་པའི་བདེན་པ་བཞི་ལ་བཟོད་པ་ཆེན་པོ་ཡོད་པ་སྟེ། དེ་ཡང་ངས་པར་འབྱེད་  
 པའི་ཆའི་བཟོད་པ་ཐོབ་པའི་སོ་སོའི་སྐྱོ་བ་ཞེས་བརྗོད་དོ། །སྤྲུལ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་གང་ཟག་གོ། །ཡོད་པར་ལྟར་པ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་རྒྱུད་པ་ཡོད་པའོ། །  
 དེ་ནི་ཆོ་རབས་སྟོང་དུ་ཡང་། ཞེས་བྱ་བ་ནི་འཁོར་བ་ན་འཁོར་བའི་སྐྱོ་བ་སྟོང་ཕྲག་དུ་ཡང་འཇིག་རྟེན་པའི་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བ་ཆེན་པོ་ཐོབ་པར་ལྟར་  
 པ་དེ་ནི་དན་འགྲོ་འགྲོ་བར་མི་འགྱུར་ཏེ། དན་སོང་གསུམ་དུ་སྐྱེ་བར་མི་འགྱུར་པ་ཉིད་དེ།  
 དེ་ནི་དེས་ན་སོ་སོར་མ་བཟླ་ག་པའི་འགོག་པ་<sup>36</sup>ཐོབ་པར་ལྟར་པའི་ཕྱིར་ཏེ། བཟོད་ཐོབ་དན་སོང་གསུམ་དུ་མི་ལྟོང་དོ། ཞེས་པའི་ལུང་གིས་སོ། །  
 དན་སོང་གིས་འཇིགས་ཤིང་ལམ་དན་པ་ལ་ཞུགས་པའི་འཇིག་རྟེན་པ་རྣམས་ལ་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བའི་ཕན་ཡོན་བསྟན་པས་གཟུང་པའི་ཕྱིར་འདི་  
 གསུངས་སོ། །

[UV iv-8, 9に対する註釈] 不放逸こそはあらゆる功德の住処であるので、  
 [不放逸によって] 捨てられるもの、それを示すため、「諸々の劣った法  
 に依存するな (hīnāṃ dharmāṃ na seveta)」等という二つの偈頌 (UV  
 iv-8, 9) が説かれたのである。これらの因縁は、「最上の罪である邪見に  
 ついて、邪見を有するプルシャ・ブドガラが身業をそのように見る」云々  
 と〔説かれる経 (①本庄 [2014b, No. 4097]<sup>37</sup> ②『雑阿含』 No. 788) に  
 おいて〕この二つの偈頌が説かれた。〈…以下略…〉

[UV iv-9に対する註釈] 【問】「邪見を望むな (mithyādr̥ṣṭiṃ na roceta)」  
 と先〔の偈 (UV iv-8c) に〕に説かれたが、そ〔の邪見〕は最初に何に  
 よって取り除かれるのか。【答】世間的な正見によって〔取り除かれるの〕  
 である。それ故、その同じもの (正見) を示すために「世間的な〔優れた〕

36) 原典では མོ་མོང་བཟླགས་པའི་འགོག་པ་ (折滅) となっているが、 མོ་མོང་མ་བཟླགས་པའི་འགོག་པ་ (非折滅) の誤りであろう。  
 根拠として三点ある。第一に、折滅は原則として無漏の慧にのみ認められる (Cf. AKVy  
 16, 1)。そして、ここでの「彼」は世間的な正見を有する異生であり、有漏の慧を有する  
 者である。ゆえに折滅が得られている状況は想定できない。第二に、UVV では折滅を寂  
 滅な状態と認めており (Cf. Balk [1984a, p. 19, 9; 1984b, p. 52, 1])、有漏の異生が寂滅を  
 得することは不合理である。第三に、AKBh 347, 20 において、三悪趣に生じない理由と  
 して、それらに対する「不学法性 (anutpattidharmatā)」を得しているから、と述べら  
 れる。そして、この「不学法性」は AKVy では、「非折滅」であると註釈される (Cf.  
 AKVy 540, 5)。ゆえに、非折滅が適当である。以上の点に基づき、  
 མོ་མོང་མ་བཟླགས་པའི་འགོག་པ་ (非折滅) に修正する。

37) この経典の冒頭と同一のものが AKBh に確認される。次の通りである。

正見である (*samyagdr̥ṣṭiḥ laukiki*)」云々と説かれる。まず、世間的な正見にさえ、そのような能力がある。〔すなわち〕三悪趣に落ちることを妨げる〔能力である〕。出世間〔の正見〕に〔そのような能力の有ることは〕言うまでもない。以上、利徳 (*phan yon*) が示された。〔これが〕こ〔の偈頌〕の要約された意味である。

【B】 不顛倒に働く見が〔世間的な〕正見であり、〔世間的な正見とは〕とある異生がある善なる見〔の力〕によって、【B-1】業と〔その〕果の存在することについて、三宝と〔四〕諦〔の存在すること〕を確信 (*\*abhisampratyaya*) し、【B-2】勝解 (*\*adhimukti*) し、欲楽 (*\*ruci*) することである。

「優れた (上品の; *adhimātrā*)」というのは「鋭さを有する」であって、要約すれば優れた階位を獲得するという意味である。そのゆえに、煖〔位〕をしっかりと保持した者は下〔品の世間的な正見〕があり、頂〔位〕をしっかりと保持した者は中〔品の世間的な正見〕があり、忍〔位〕をしっかりと保持した者は優れた (上品の) 〔世間的な正見〕がある。世間的 (*\*laukikatvena*) であるから「世間的な (*laukiki*)」であり、有漏である。【A】【問】いかなる階位によって世間的な正見 (*\*laukiki samyagdr̥ṣṭiḥ*) は優れるのか。【答】答える。次のような〔階位〕である。〔則ち〕この異生 (*\*prthagjanabhūta*) には、四聖諦に対して優れた忍得<sup>38)</sup>がある。そして彼は「〔順〕決択分の忍〔位〕を得した異生」と言わ

---

AKBh 264, 10 (Cf. 舟橋 [1989, pp. 467-468])

yat tarhi bhagavatā trayāṇāṃ daṇḍānāṃ manodaṇḍo mahāsāvadya uktāḥ, mityādr̥ṣṭiḥ paramāvadyānām<sup>(1)</sup> ity uktam |

もしそのようであるならば、世尊によって「三つの罰の中で意罰が最も大罪あるものである」と説かれており、更に「邪見は諸罪の中で最極なるものである」と説かれているのは〔どういうわけか〕。

(1) *paramāvadyānām* は *paramāvadyānām* に舟橋 [1989, p. 469] は修正する。

本庄 [2014b, pp. 617-618] に指摘されているように、この経典は AKUp に対応する経典が認められ、UV iv-8, 9 も含まれる。本庄 [2014b, p. 618] に指摘されるように『雑阿含』(788)に対応する。また、梵文『増一阿含』[pp. 156-158] にも対応が認められる。

38) ここでの優れた忍は世第一法の一刹那前の上品の忍位 (上忍) ではない。忍位の語源的説明を「忍位は煖(下品)、頂(中品)、忍(上品)の三つの階位の中で最も四諦に優れて

れるのである<sup>39)</sup>。「ある人に (yasya)」というのはブドガラにである。「ある (vidyate)」というのは〔心身の〕相続にあるのである。「その人は千度生まれ変わろうとも (api jātisahasrāṇi asau)」とは輪廻を輪廻しつつ千の生涯においても世間的な優れた正見を得た彼は悪趣に落ちることはないであろう。〔彼は〕まさしく三つの悪趣に生じることがない。彼にはそれゆえ、非摂滅が得されたからである。「忍を得た者は三悪趣に落ちない」とのアーガマによる<sup>40)</sup>。

悪趣を恐れ、劣った道に入る世間の人々に、正見の利益を示すことによ

(上品) 忍得するから忍位である」(Cf. AKBh 344, 8-10; 註3)との有部の伝統的な解釈に準えて行ったものであろう。

39) この回答における忍位の解釈は AKBh 344, 8-10 に酷似する (Cf. 註4)。

40) 忍の不墮悪趣性は『雑阿毘曇心論』[T.28.909c18] や『阿毘曇毘婆沙論』[T.28.19b16 等]<sup>(1)</sup>に初めて登場する概念であり、それ以前の論書、『発智論』や『阿毘曇心論』、『阿毘曇甘露味論』等に認められない。また、『雑阿毘曇心論』では教証が挙げられない。その一方、『阿毘曇毘婆沙論』においては様々な經典に基づいて忍に不墮悪趣性があることを述べる。しかし『阿毘曇毘婆沙論』が挙げるいずれの教証においても「忍」や「世間正見」等の直接的な文言はなく、「この経において人が悪趣に赴かないのは、実は忍の不墮悪趣性に基づくものであったのである」との趣旨で説明するのみである。忍位が經典に直接的に説示されることのなかった階位である事や、忍位の成立が妙音『生智論』(散逸)である事は既に指摘されている (Cf. 印順 [1968, pp. 245-246]、田中 [1976]、周 [2009, p. 64])。このことから、忍位の成立以前には、忍位の不墮悪趣性も、当然存在せず、それゆえに經典において直接的な言及が存在しないことが推測できよう。ゆえに、ここでのアーガマ (lung) は経ではなく、論を指しているものと推測される。例えば AKBh には次のように規定される。

AKBh 347, 19 (Cf. 櫻部・小谷 [1999, p. 148])

**kṣāntilābhy anapāyagaḥ | (23b)**

vihiṇyām api kṣāntau na punar apāyān yāti tadgāmikakarmakleśadūrikaraṇāt<sup>(2)</sup> | kṣāntilābhād eva hi gatiyonupapattyāśrayāṣṭamādibhavadakleśānām keṣāṃcid anutpattidharmatām<sup>(3)</sup> pratilabhate,

**忍を得た者は悪趣に赴かない。(23b)**

〔忍を得た行者は〕忍が捨される場合も、二度と悪趣に赴かない。そ〔の悪趣〕に行く〔因となる〕業と煩惱とを遠ざげるからである。〔彼は〕忍を得ること自体によって、①ある種の趣と、②〔ある種の〕生まれ方と、③〔ある種の〕生まれ変わりと、④〔ある種の〕依〔身〕と、⑤〔ある種の〕八回目以上の生存と、⑥〔ある種の〕煩惱との、不生法性を得るからである。

(1) 当該の記述は『大毘婆沙論』[27.27a24] と対応する。また 周 [2008, pp. 136-139] は当該の二十億耳の逸話が忍の不墮悪趣性の出典であると推測する。

(2) 櫻部・小谷 [1999, p.150] に従い bhūmika は gāmika に訂正。

(3) 櫻部・小谷 [1999, p.150] に従い dharmatā は dharmatām に訂正。



って導くために、〔世尊によって〕こ〔の UV iv-8, 9〕が説かれた。

上述の UVV の解釈に際して、特に注目すべきは【A】と【B】の二点である。

第一に、【A】の点について述べたい。当該箇所は UV iv-9 に登場する「優れた世間的な正見 (samyagdr̥ṣṭir adhimātrā laukiki)」に対する註釈である。

ここでは UV に登場する「優れた」を「順決択分の忍位」として解釈し、「世間正見」を「四聖諦に対する忍得 (有漏の忍)」と解釈している。つまり、UVV は順決択分の煖位・頂位・忍位において働く「有漏の忍<sup>41)</sup>」を「世間的な正見」と同一のものとみなしているのである<sup>42)</sup>。

第二に、【B】について述べたい。当該箇所では「世間的な正見」の論的な規定について言及する<sup>43)</sup>。すでに、第一の点において「有漏の忍」が「世間的

41) UVV において世第一法は登場しない。恐らくはただ省略されたのではなく、世第一法の持つ特殊性に基づき、敢えて挙げなかったものと推測される。

42) 本稿で取扱う「有漏の忍」すなわち、「善性の有漏の忍」(Cf. 註1)と「世間的な正見」は全同といっても過言ではない。なぜならば、「世間的な正見」であるが「善性の有漏の忍」でないもの、あるいは、「善性の有漏の忍」であるが「世間的な正見」であるものは想定できないからである。なぜならば、忍が推度を有するものであれば、それは推度を有するがゆえに見であり、見は「五見」と「世間的な正見」の六種しか認められていないからである (Cf. 註17)。ただ、それゆえに、五見を「悪性の有漏の忍」であると言うことは可能であろう。

また、「優れた世間正見」こと、「忍位における有漏の忍」は、「世間的な正見」の一部である。忍位や順決択分以外に「有漏の忍」や「世間的な正見」が想定される可能性が存在するからである (Cf. 註26)。ゆえに、「世間的な正見」の全てが、「順決択分における有漏の忍」に包括されるものではないことに注意したい。

43) 当該の UVV の規定は論的な規定である。世間的な正見は AKUp の引く經典にも登場する。以下がその内容である。

AKUp [P. Tu234b8, D. Ju205b6] (訳は本庄 [2015b, pp. 519-523] より引用)

(1) 正見とは何か。その正見に二種がある。有漏、有取にして、善趣を成就する世間的な見もある。無漏、無取にして、苦を滅し、苦に終止符を打つことを成就する超世間的な正見もある。有漏、有取にして、善趣を成就する世間的な正見とは何か。「布施はある。祭祀はある。善行はある。悪行はある。善行と悪行なる業の果、異熟はある。この世はある。あの世はある。父はある。母はある。化生の有情はある。正しく理解し、正しく実践し、この世をもあの世をも現世に於て自ら勝れた智慧によって直観し、『我が生は尽きた。梵行は行ぜられた。なすべきはなしおえた。この生存より他〔の生存〕を知ることはない』と〔いう境地を〕完成し、覚る阿羅



な正見」であることは確認した。則ち、この「世間的な正見」の法相的な規定は、「有漏の忍」の規定であると言えよう。

#### 4. UVV の規定と AKBh との関連

この UVV の述べる「世間的な正見」こと、「有漏の忍」の定義であるが、【B-1】、【B-2】の規定はそれぞれ、AKBh に見られる信 (śraddhā) と勝解 (adhimukti) の定義と完全に対応する。

第一に、【B-1】については次のように AKBh の信に対する有余師説との対応が見られる<sup>44)</sup>。

---

漢はこの世にある」という見解である。これが有漏、有取にして、善趣を成就する世間的な正見である。

無漏、無取にして、苦を滅し、苦に終止符を打つことを成就する超世間的な正見とは何か。この世で聖弟子が、苦を苦と作意し、集を集と、滅を滅と、道を道と作意する〔場合の〕、無漏の作意と相応する、諸〔法の〕分析、すぐれた分析、分別、説明、表明、親近、明知、智慧、慧、覚、通達、遍知、考察、観察、これが無漏、無取にして、苦を滅し、苦に終止符を打つことを成就する超世間的な正見と呼ばれる。

また、上述の經典に対応するであろうものが『雜阿含』に存在する。しかし、観察対象の記述は省略されてしまっている (Cf. 釋開仁 [2006])。また、『決定義經』では八聖道の正見を説明する際に「この世はある。あの世はある。父はある。母はある。化生の有情はある。」云々といった同一のフレーズを用いて正見の説明が行われている (Cf. 本庄 [1989, pp. 25-26])。

44) UVV は、信の規定に関して、一部を除き、AKBh で用いられる規定と類似する規定を述べる。冒頭部のみ引用すると、次の通りである。

UVV Balk [1984a, pp. 394, 30-395, 3]

དད་པ་ནི་མཉམས་གྱི་རབ་ཏུ་དང་བ་སྟེ། མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པ་དང་། རྟོན་དུ་གཉེར་བའི་མཚན་ཉིད་ཀྱི་དབྱེ་བས་རྣམས་གཉིས་སོ། །གང་མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པ་སྟེས་པ་དེ་ནི་ལ་ཅིག་རྟོན་དུ་གཉེར་བར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་དོ། །གང་ལ་མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་ལས་དང་འབྲས་བུ་འབྲེལ་པ་དང་དྭོན་མཚོག་གསུམ་ལ་སོགས་པ་ལམོ། །

信 (\*śraddhā) とは、心の透明さ (\*prasāda) であり、確信 (\*abhisampratya) と希求 (\*prārthanā) との特徴の区別によって、二種である。確信が生じたもの、それを一部の人は希求するだろうからである。あるものに対して確信するとは、〔則ち〕業と〔その〕果の関係性と、三宝等に対して、である。

また、①透明さ、②確信、③希求の三語を用いる註釈は安慧の『三十頌釈』p. 26, 24-26 等の唯識系文献等においても認められる。

AKBh 55, 6-7

tatra śraddhā cetasaḥ prasādaḥ | satyaratnakarmaphalābhisampratyaya  
ity apare |

このうち、信は心が透明であることである。【有余師説】他の人々<sup>45)</sup>は「〔四〕諦と〔三〕宝と業〔とその〕果を確信することである」と〔主張する<sup>46)</sup>〕。

第二に、勝解の定義に関しては、櫻部 [1997, pp. 34-39]<sup>47)</sup>が指摘するように諸訳において異なりがあるものの、【B-2】については次のように蔵訳『俱舍論』<sup>48)</sup>や AKVy の有余師説と対応する。

蔵訳『俱舍論』 [P. 72a8, D. 64b5] (Cf. AKBh 54, 23)

45) 荻原・山口 [1934, p. 61 註1] はこの定義が世親の『五蘊論』や、安慧の『三十論釈』のものと同一であることを指摘する。有余師説の背景は一色 [2015] の論考に詳しい。また、有余師説と近似する解釈は『入阿毘達磨論』 [T.28.982a28-30] や、UVV が用いる「信」の定義 (Cf. 註44) にも見受けられる。

46) AKVy には次のようにある。

AKVy 128, 17

satyaratnakarmaphalābhisampratyaya ity apare iti | ākāreṇa śraddhānirdeśaḥ |  
satyeṣu caturṣu ratneṣu ca triṣu karmasu ca śubhāśubheṣu tatphaleṣu ca  
iṣṭāniṣṭeṣu samty evaitānity abhisampratyayo 'bhisampratipattiḥ śraddheti |  
「他の人々は「〔四〕諦と〔三〕宝と業果を確信 (abhisampratyaya) することである」と〔主張する〕。」とは、「四諦と三宝と淨不淨の業と、そ〔の業〕による好ましく・好ましくない果に対して「必ずそれらには有る」との確信 (abhisampratyaya)、理解 (abhisampratipatti) が信である」と、行相によって信を説明した。

また、TA や LA は信を註釈する際に、勝解と関連付けている。なお、LA は異読を除き TA と共通するので省略する。

TA [P. 218b6, D. 184b2-3] (LA [P. 159a2, D. 137a3-4])

གཞན་དག་ནི་ཅེ་བདེན་པ་དང་དགོན་མཚོག་ཅེས་བྱ་བ་ལ་མོགས་པ་ལ། བདེན་པ་དང་། དགོན་མཚོག་རྣམས་དང་། ལས་རྣམས་དང་། འབྲས་བྱ་རྣམས་ལ་མཛད་

པར་ཡིད་ཆེས་པ་སྟེ། ཡིད་ཆེས་ཤིང་ལེགས་པ་འདོད་པ་དང་། མོས་པ་གཞོས་འདེབས་པ་ནི་དད་པ་ལོ། །

「他の人々は、〔四〕諦と〔三〕宝と云々」とは、〔四〕諦と〔三〕宝と諸業と〔その〕諸果に対する確信(\*abhisampratyaya)であって、確信(\*sampratyaya)しつつ、善なることを願うことと、勝解を養生(\*poṣana)することが信である。

他にも、この TA や LA の解釈と同様の解釈が『順正理論』 [T. 29. 391a20] にも存在する。

47) 櫻部 [1969, p. 28 註3] では、adhimukti の定義が説一切有部において定まったものではない可能性を指摘する。また、櫻部 [1997, pp. 34-39] では論書に見られる adhimiukti の定義を整理する。その際に、ruci と解釈するものとして、AKVy の第二釈、『蔵訳俱舍論』、TA 第一釈、LA 第一釈、『アビダルマディーパ』第一釈を挙げる。

48) 対応する AKBh 54, 23 では adhimiokṣo 'dhimiuktiḥ | と言い換えている。勝解の定義については 櫻部 [1969, p. 28] を参照。

མོས་པ་ནི་འདོད་པ་ལོ། །

勝解とは欲楽である。

AKVy 128, 2-3

adhimuktis tadālabhanasya guṇato 'vadhāraṇam | rucir ity anye |

勝解はその所縁を特質 (guṇa) として確定することである。【有余師説】  
他の人々は「〔勝解とは〕 欲楽である」と〔主張する〕。

このことから、UVV では、「世間的な正見」を AKBh で述べられる信や勝解と密接な関係があるものとして理解していることが見受けられる。

そして、UVV が規定するように、信や勝解が強く働いている慧が「世間的な正見」であるとするならば、四善根の際に生じている大善地法である信を伴った心は善心である。そして大地法として随伴する慧は、善慧と言うことができよう。これは先ほどに挙げた「意識と相応する有漏の善慧である<sup>49)</sup>」という AKBh における世間的な正見の規定とも対応する。また、「四善根等と俱生する慧は世間正見である」とする『大毘婆沙論』の記述とも矛盾しない<sup>50)</sup>。

さらに、UVV では「世間的な正見」こと「有漏の忍」を「勝解」や「欲楽 (ruci)」と関連付けて説明している。この「有漏の忍」と「欲楽」の関係は、先程挙げた AKBh 等で「有漏の忍」を説明する際に「欲楽 (√ruc)」と関連付けて説明していたことと対応する。そしてそうであれば、AKVy 等で見られる「欲楽」は「勝解」と同義の「欲楽」であろう。

このことから、UVV の行う「世間的な正見」、延いては「有漏の忍」の定

49) Cf. 註23 ; AKBh 39, 18

50) これに加え、『大毘婆沙論』[T.27.502a17-25] (Cf. 註10) が用いる規定とも矛盾しない。  
また、世間的な正見については TA や LA に簡潔な記述が見受けられる。なお、LA は TA と完全対応するので省略する。

TA [P. 441a5, D. 283b2] (LA [P. 269b1, D. 220a2])

འཇིག་རྟེན་པའི་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བུ་ཞིས་བྱ་བ་ནི། ལྷོ་དང་འབྲས་བུ་ལ་མོགས་པ་དག་ལ་ཡོད་པར་ལྟ་བུ་ལོ། །

「世間的な正見」とは、因と〔その〕果等を存在すると見ることである。

この解釈においては「等」とされ、省略されているものの、UVV に見られた「業とその果の存在性について…中略…確信し、」という内容や、AKBh に見られた信の定義を彷彿させる。

さらに、『中観五蘊論』[D. 247b2-7] (Cf. 横山 [2014a, pp. 39-41]) においても信と世間的な正見の関係が述べられる。横山 [2014a, p. 41, p. 41 註50] が述べる見解との差異の詳細は次章に述べる (Cf. 註59, 61)。

義は有部のアビダルマの法相、特に AKBh 所説の法相を逸脱しないように意識したものであると見なせよう<sup>51)</sup>。

## 5. UVV の規定と『中観五蘊論』との関連

先の検討において、UVV の行う定義が AKBh や幾つかの有部論書の規定から逸脱しないことを述べた。しかしながら、「世間的な正見」と信・勝解との関連性を述べる直接的な言及は見られなかった。その一方、UVV と同じように、「世間的な正見」と信・勝解に密接な関係があることを伺わせる記述が、月称<sup>52)</sup>『中観五蘊論』<sup>53)</sup>の信の記述<sup>54)</sup>に見いだせる。以下が『中観五蘊論』の当該箇所の内容である。

『中観五蘊論』横山 [2014a, p. 40 註49] (Cf. D. 247b2-5, P. 283b1-7)<sup>55)</sup>

51) 「有漏の忍」と信の関係を仄めかす記述が『チムゼー』に存在する。

『チムゼー』小谷 [2004, p. 16, p. 17]

རྫོགས་པ་སྒྲིམ་པའི་ཡེ་ཤེས་བཞི་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱང་དྲན་པ་ཉེར་གཏམ་གྱི་(322, b)གི་ངོ་བོ་ཉིད་ཡིན་པའི་ཕྱིར་གཙོ་བོ་ཤེས་རབ་ཡིན་པ་སྒྲིམ་པ་ཉིད་དཔ་པ་སྒྲིམ་པ་

དང་མཐུངས་པར་ལྟོན་ནི།

煖などの四つの智は、すべて念住をその本質とするので、主たるものは智であるが、助伴として信などを伴う。

また、普光『俱舍論記』においては忍に四種の解釈があるとし、そのうちの一つとして「信」を挙げる。

『俱舍論記』[T.41.383b25-28]

泛言諸忍略有四種。①若忍辱名爲忍。即無嗔名爲忍。②若安受苦忍名爲忍。即精進名爲忍。③若忍許名爲忍。即信名爲忍。④若觀察法忍名爲忍。即慧名爲忍。(番号は筆者が挿入)

52) 『中観五蘊論』の著者が月称であるかどうかについては問題が提起されているが、今は仮に月称との理解を踏襲する。この問題については横山 [2014a, p. 37 註46] において簡潔明瞭に纏められている。

53) 『中観五蘊論』は中観系の論書であるが、瓜生津 [1976] や、池田 [1985] 等が指摘するように一部を除いて有部教説の強い影響が見られる論書であると指摘されている (Cf. 岸根 [2001, pp. 39-41]、横山 [2014a])。この点については本庄 [2012, pp. 192-193] が指摘しているように、月称もアビダルマを世俗としては認めていたからであろう (この点については本庄良文先生より直接ご教示を受けた。この場で厚く御礼申し上げたい)。

54) 『中観五蘊論』は現在、横山氏によって研究されつつある。また氏は信の定義について横山 [2014a] として、紹介、検討されている。また、信の定義に関しては、『牟尼意趣莊嚴』に一部対応箇所が存在する (Cf. 横山 [2014b]、李・加納 [2016])。

55) Cf. 『入阿毘達磨論』[T.28.982a-b]

【定義】དད་པ་ནི་བདེན་པ་དང་། དཀོན་མཆོག་དང་། ལས་དང་འབྲས་བུ་ལ་མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པ་ལོ། །

【定義の解説】【1】དེ་ལ་བདེན་པ་ནི་བཞི་སྟེ། སྤྱུག་བསྐལ་དང་། ཀླུ་འབྱུང་དང་། འགྲོག་པ་དང་། ལས་ཞེས་བྱ་བ་ལོ། །ཡང་ན་རྣམ་པ་གཉིས་ཏེ། ཀླུ་རྫོབ་དང་དོན་རྣམ་པ་ཞེས་བྱ་བ་ལོ། །དཀོན་མཆོག་ནི་གསུམ་སྟེ། སངས་རྒྱུས་དང་། ཚས་དང་། དགོ་འདུན་ནོ། །ལས་ནི་བསོད་ནམས་དང་། བསོད་ནམས་མ་ཡིན་པ་དང་། མི་གཡོ་བ་ལོ། །འབྲས་བུ་ནི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་དང་བུལ་བ་ཞེས་བྱ་བ་ལོ། །【2】དེ་དག་གི་དཔལ་སྤྱིར་ལ་འདེབས་པ་ནི་ལོག་པར་ལྟ་བུ་སྟེ། མེད་པའི་རྣམ་པར་ཞུགས་པ་ལོ། །འཇིག་རྟེན་པའི་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བུ་ནི་ཡོད་པའི་རྣམ་པར་ཞུགས་པ་སྟེ། དེ་ལྟ་བུའི་ཡང་དག་པའི་ལྟ་བུ་བས་རྟོགས་པའི་ཡོད་པ་ལ་མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པའི་རྣམ་པ་ནི་དད་པ་ལོ། །【3】དད་པའི་སྟོབས་ཀྱིས་ཡོད་པ་དེ་དག་ངེས་པར་འཛིན་པ་དེ་ནི་མ་དད་པའི་གཉེན་པོར་གྱུར་པ་ལོ། <sup>[56]</sup>

【定義】信（\*śraddhā）とは、諦と、宝と、業と、〔その〕果とに対して確信（\*abhisampratyaya）することである。

【定義の解説】【1】その中で、諦とは四つであって、苦〔諦〕、集〔諦〕、滅〔諦〕、道〔諦〕と呼ばれる。あるいは、二種であって、世俗〔諦〕と、勝義〔諦〕と呼ばれる。宝とは、三つであって、仏〔宝〕、法〔宝〕、僧〔宝〕である。業は福〔業〕と、非福〔業〕と、不動（\*āneñjya）〔業〕である<sup>57)</sup>。果は異熟〔果〕と、離繫〔果〕と呼ばれる。【2】その同じもの（三宝・四諦・業果の存在）を損滅する（\*apavādika）〔見〕が邪見である、〔即ち、それらが〕存在しないとの行相を持って起こった（\*asad-ākāra-pravṛtta）〔見〕である<sup>58)</sup>。世間的な正見は〔それら三宝・四諦・業果が〕存在するとの行相を持って起こった〔見〕である。そのような〔世間的な〕正しい見解によって、理解された存在に対して、確信（\*abhisampratyaya）する行相をもつ〔心所法〕が信（\*śraddhā）である<sup>59)</sup>。

56) 本文は 横山 [2014a, p. 40 註49] に挙げられているものを借用し、チベット文字に変換した。引用箇所科段についても 横山 [2014a, p. 40 註49] に従った。異読に関しては省略した。また、【機能の解説】は直接的に本論と関係しないため今は省略した。

57) Cf. AKBh 227, 10-12

58) Cf. 註59; AKBh 282, 4-6

59) この表現は AKBh における五見中の邪見の定義とも対応する。AKBh における五見とは存在に対して損滅と増益を伴った見であり、そのうち邪見とは損滅を伴った見であると規定される。

AKBh 282, 4-6 (Cf. 小谷・本庄 [2007, pp. 34-35])

sati duḥkhādisatye nāstīti dṛṣṭir mithyādr̥ṣṭiḥ | sarvaiva hi viparītasvabhā-

【3】信 (\*śraddhā) の力によって、それら〔三宝・四諦・業・果〕の存在を確定 (\*avadhāraṇa) すること<sup>60)</sup>、それが不信の対治である。

ここでは、【1】として定義に省略されている所を述べ、【2】においては信の作用について述べ、【3】においては信の効能を述べている。そして、これらの記述はいずれも中観的な傾向を有する記述ではなく、有部教説に基づく記述である<sup>61)</sup>。そしてこのうち、【2】と【3】の記述は先の UVV の記述とも

vapraṇvṛtā dṛṣṭir mithyādrṣṭiḥ ekaiva tūktā | atiśayavattvāt durgandhaghr̥t-tavat<sup>(1)</sup> | eṣā hy apavādikā anyās tu samāropikāḥ |

存在する苦などの諦を「存在しない」とする見が邪見である。たしかに、顛倒した本性を持って起こった<sup>(2)</sup>見はすべて邪見であるが、一つだけが〔邪見と〕説かれた。顕著であるからである。臭い酥（バター油）と同様である。なぜならば、こ〔の邪見〕は損減する〔見〕であるが、他〔の四つの見〕は増益する〔見〕だからである。

(1) durgandhakṣatavat はソウチャイ[2003]に従い durgandhaghr̥t-tavat に訂正する。

(2) pravṛtta; རྒྱུ་མཁུ་. このような用例は AKVy 683, 14 等にも見られる。

なお、有部における邪見についてはソウチャイ[2003]によって詳細に整理、検討されている。

一方、広義の正見の規定は AKBh において見いだせなかった。ただ AKBh「業品」の善根の続起の説明に際して「因果は存在する」と見ることが正見である」との意趣が付随的に述べられる。

AKBh 250, 14-16 (Cf. 舟橋 [1987, pp. 374-375])

**sandhiḥ kāṅkṣāstidrṣṭibhyām, (80c)**

yadā 'sya hetuphale vicikitsā cotpadyate<sup>(3)</sup>, astidrṣṭir vā, samyagdrṣṭir<sup>(4)</sup> ity arthaḥ, tadā punas tatprāptisamutpādāt pratisandhitāni kuśalamūlāny ucyante |

**疑と有の見より、続起がある。(80c)**

ある人に、因果に対する疑いが生じる時、あるいは「〔因果は〕存在する」との見が一正見が、との意味である—〔生じる〕時、その時には、それら〔諸善根〕の得が再び生ずるゆえに、諸々の善根は続起したと言われる。

(3) この ca は意味が取れない。vā の誤写であろうか。

(4) samyak drṣṭir は Hirakawa [1973, p. 432] に従い samyagdrṣṭir に訂正。

また、正見についてはシャマタデーヴァが用いる有部の経典 (Cf. 本庄 [2014b, pp. 792-793] (本庄No.6080) ; 註43) や『決定義経』(Cf. 本庄 [1989 pp. 25-26]) にもいくらかの対象に対して存在すると見ることであると示されている (著者よりのご教示)。また、TA や LA においては「世間的な正見」とは、因と〔その〕果等を存在すると見ることである。」と、世間正見を規定する (Cf. 註50)。これらの点を総括すれば、広義の正見とは存在するものである四諦等について、唯存在するだけ見る、損減と増益を伴っていない不顛倒の見であると推測される。

60) Cf. AKVy, 128, 2. その内容は「4. UVV の規定と AKBh との関連」を参照。

61) 横山 [2014 p. 41 ; p. 41, 50] では三つの定義の解説のうち (1) と (3) については有部アビダルマ文献に見いだせるものであるとする一方、(2) で用いられた「འཇིག་རྟེན་བཤིམ་པ་དག་པའི་ལྟ་བུ་» は有部が述べる所の「世間的な正見 (laukiki samyagdrṣṭiḥ)」ではなく中観派の二諦説に基づく中観的な理解であるとの見解を示す。

対応する。

まず『中観五蘊論』では、【2】において、「世間正見としての 三宝・四諦・業・果 の確信 (abhisampratyaya) こそが信である」とする。この内容は先の UVV で見られる【B】の内容と対応するといえよう。

ついで、【3】において、「信の力」によって、それら〔三宝・四諦・業・果〕の存在を確定 (\*avadhāraṇa) すること」があると述べる。ここでの「信の力」とは信の作用、「対象に対する確信 (\*abhisampratyaya)」であろう。そしてこの「確定 (ཇེས་པར་འཛིན་པ་; \*avadhāraṇa)」という心作用であるが、勝解の作用である<sup>62)</sup>。そしてそうであれば、信から勝解という構造が見いだせ、この構造は UVV における【B-2】と対応しよう。

以上の点より『中観五蘊論』の記述は UVV と近似する傾向、即ち「世間正見と信を同一視し、その力で、勝解する」と捉えていることが窺える。このことから UVV の記述が UVV の独自のものではなく、なんらかの有部系アビダルマの伝統として引き継がれた解釈である可能性が窺えよう。

## 6. 『坐禅三昧経』と「有漏の忍」

UVV において「有漏の忍」は UV iv-9 を根拠として提示されたが、それと

---

横山 [2014a, p. 41 註50]

ここで解説される「世間的な正しい見解」を「世間正見」と同一視し、他の箇所と同様に有部教説の踏襲であるとも考えることも確かに可能である。しかし、その場合、「諦」「宝」「業果」に対する理解が「世間正見」に限定されることになる。以上のように、有部教説に基づいて当該箇所を理解するよりは、無自性論証による過剰な否定を防ぎ、実世界における事物の有効性を保証する中観派の二諦説の文脈で理解する方が自然であると考えられる。

ここで横山は「「諦」「宝」「業果」に対する理解」が世間正見に限定されてしまうことを危惧している。しかし当該箇所の記述は、厳密には「「諦」「宝」「業果」が存在するとの正しい見解に基づく理解」である。諦等を損減も増益もなく正しく不顛倒に存在するとみることこそが正見である (Cf, 註59)。このことから (2) の記述も有部教説に基づく記述とみなしても良いであろう。

62) その内容については既に述べたので再説しない。当該の記述は AKVy 128, 2-3, 第四章の本文を参照のこと。また、TA や LA においては「信が勝解を養成する」との旨が註釈される (Cf. 註46)。



同様の解釈が『坐禅三昧経』下巻の声聞の出世間道より回収される<sup>63)</sup>。その解釈は次の通りである。

『坐禅三昧経』[T.15.280a9]<sup>64)</sup>

仏陀が『法句』<sup>65)</sup>において〔次のように〕説いている通りである。

「世間的な優れた正見を獲得した者は、一千万〔回目の〕生涯まで、  
終に〔三〕惡道に墮落することはないだろう」と。

こ〔偈中〕の世間的な〔優れた〕正見は忍善根と名付けられる。

ここでは、UV iv-9 を用いて、「優れた世間的な正見が忍善根である」と規定される<sup>66)</sup>。この規定は先の UVV における【A】の記述と対応しよう。

63) UV には二種の漢訳註が存在するが、いずれにおいても同様の解釈は確認されない。  
『出曜経』に関しては 平岡 [2007] によって中国編纂の文献である可能性が指摘されている。また、『法句譬喻经』に関しては榎本 [2001b, p. 280] によって中国編纂の文献である可能性が指摘されている。

64) 『坐禅三昧経』[T.15.280a09]

如佛說法句中

世界正見上 誰有得多者 乃至千萬歳 終不墮惡道。

是世間正見是名爲忍善根。

対応する梵文は本論第三章冒頭部、及び註66を参照。対応する漢訳に関しては註31を参照。

65) UV はパーリ *Dhammapāda* と *Udāna* に対応する内容を合してさらに増広させたものなので、ここでいう『法句』は UV に対応する (Cf. 水野 [1981, pp. 13-14])。

66) 世間的な正見の記述ではなく、忍位の不墮惡趣を論証する際に用いられる用例として、『声聞地』や 無性『摂大乘論釈』[T.31.395a22] 等が存在する。今は『声聞地』の記述のみを紹介すると次の通りである。

『声聞地』第一瑜伽処 Shukla [1973, p. 29] (Cf. 声聞地研究会 [1998, p. 55])  
punar aparāṃ avatīrṇaḥ pudgalo na ca tāvad viśaṃyukto bhavaty apāyākṣa-  
ṇagamanīyāḥ kleśāḥ, na ca punar akṣaṇeṣūpapadyate | avatīrṇaṃ ca pud-  
galaṃ sandhāyoktaṃ bhagavatā |

samyagdr̥ṣṭir adhimātrā laukikī yasya vidyate |

api jātisaḥsrāṇi nāsau gacchati durgatim ||

sa punar yadādhimātreṣu kuśalamūleṣu praviṣṭo bhavaty anupūrveṇa  
paripākagamanīyeṣu tadā nākṣaṇeṣūpapadyate, na tv anyeṣu | idaṃ dvitīyaṃ  
avatīrṇasya pudgalasya liṅgam ||

さらにまた、趣入したブドガラは、未だ惡趣と難処に通じる煩惱より離繫していても、二度と難処に生じない。〔このような〕趣入したブドガラを密意して世尊によって〔次の偈が〕説かれた。

ある人に世間的な優れた正見が有れば、

彼は千度生まれ変わろうとも、惡趣に赴かない。

さらに、そ〔の趣入したブトガラ〕が、次第に、成熟に通じる優れた（上品の）善根に入った時、その時には難処に生じない。他の〔善根〕に入った者は〔そうで

『坐禪三昧經』下巻が中国人によって述作されたものではなく、鳩摩羅什がインド由来の情報を編纂して成ったものである可能性については拙稿（田中 [2015]<sup>67)</sup>）においてすでに論じたが、上の考察により、（１）鳩摩羅什が「坐禪三昧經」を制作した五世紀の初頭以前には「優れた世間的な正見」と「忍善根（順決択分の忍位）」を関連付ける解釈がインドにおいて存在したこと、（２）それを羅什が継承したこと、（３）その解釈が有部につながるものであること、を推測して良いであろう。

## 7. 結論

以上、本稿では有部系アビダルマにおける「有漏の忍」の記述を分析した。明らかとなった点を整理すると次の通りである。

- (A) AKBh 等の有部論書において、「有漏の忍」は「欲樂 (√ruc)」と密接な関係をもって説明される。しかし、その内実は明確に記述されない。
- (B) AKBh 「智品」では「智」の性質の有無という点で「有漏の忍」と「無漏の忍」は別異である。『大毘婆沙論』の記述を援用すれば「有漏の忍」は「世間的な正見」であり「見」でもある。
- (C) UVV では UV iv.9 における「優れた世間的な正見」について、「優れた」を「順決択分の忍位」と解釈し、「世間的な正見」を「四諦に対する忍得（有漏の忍）」であると解釈する。すなわち、UVV は「有漏の忍」を「世間的な正見」として「見」であると見做している。

---

は）ない。これが趣入したプトガラの特徴である。

※本箇所に対して『瑜伽論記』[T.42.433a9]はこの不墮惡趣の位が上品の忍位であると註釈する。

67) 田中 [2015] においては『坐禪三昧經』下巻に説示される「声聞の出世間道」が中国人によって述作されたものではない可能性を述べた。主な根拠としては次の二点である。

（１）『坐禪三昧經』の構造は当時中国に伝来していなかった『瑜伽師地論』中の「声聞地第三瑜伽処・第四瑜伽処」と近似している点、（２）真実の樂受は存在しないとの経部的な見解をめぐって『坐禪三昧經』の記述は中国伝来資料を基に中国人が述作したものではない可能性が窺えた点。

そしてこの理解は (B) の『大毘婆沙論』の規定とも対応する。

(D) UVV は「世間的な正見」を「四諦と三宝と業とその果の存在に対して確信し、勝解し、欲楽することである」と規定する。(C) を踏まえればこの規定は「有漏の忍」の規定とも見なせよう。

(E) (D) の定義は、AKBh の信と勝解の定義と対応し、さらに AKBh 所説の「世間的な正見」の定義と抵触しない。また、(B) における『大毘婆沙論』の規定とも対応する。このことから UVV は AKBh 等の有部系アビダルマの伝統に基づいたものであると言える<sup>68)</sup>。

(F) (E) で述べたように (D) の定義の一部は AKBh の勝解の定義と対応し、「有漏の忍」と勝解・欲楽の関連がみいだせた。このことから、AKBh 等で「有漏の忍」が「欲楽」として解釈されるのは、「勝解」が含意されているからと言えよう。

(G) (C) と同一傾向を有する解釈が『中観五蘊論』に見いだせる。このことから UVV の解釈は、独自のものではなく、なんらかの有部系アビダルマの伝統に基いていると言えよう。

(H) (C) と同様に、UV iv-9 を用いて「順決択分の忍位」と「優れた世間的な正見」を関連付ける解釈は鳩摩羅什が作成に携わった『坐禅三昧経』にも存在する。ゆえに、UV iv-9 を用いた解釈は UVV 独自のものではなく、五世紀以前には存在した有部系の伝統的な解釈であることが窺える。

今回の検討に基づけば、UVV における「有漏の忍」の解釈は有部系アビダルマの伝統に基づくものである。そしてそうであれば、AKBh における「有漏の忍」の規定も UVV と同様であった可能性が高い。

いずれにせよ、UVV における詳細な「有漏の忍」についての解釈は、最も深く踏み込んだものであり、有部の順決択分の研究にとって重要な資料となるであろう。

68) UVV とアビダルマの関係を論じた論考は未だ存在しない。その中、本庄 [1990, p. 60, p. 69 註1, 4] は UV xxix-24 について『釈軌論』の声聞の立場と UVV が同種であることを指摘している。

[付記] 本原稿において AKBh や AKVy を翻訳する際には櫻部 [1969]、舟橋 [1987]、小谷・本庄 [2007]、櫻部・小谷 [1999]、櫻部・小谷・本庄 [2004] を参考にした。

また、学会発表の際には田中典彦先生、並川孝儀先生、本庄良文先生にご質問頂いた。また、本稿執筆にあたってはご多忙の中、松田和信先生と本庄良文先生、清水俊史氏より貴重なご意見を多数頂戴した。この場にて厚く御礼申し上げたい。

[追記] 本稿の校正中に、浪花宣明先生より平成27年11月20日に重版された『サーラサンガハの研究』を頂戴した。その pp. 273-274 に、忍の語義についての紹介があり、そこに『清浄道論』等に見られる解説として、khanti を  $\nmid$ ruc と関連付ける説示が見受けられた。しかし、本稿に反映することはできなかった。貴重な情報を頂戴したことを、この場にて厚く御礼申し上げたい。

#### 略号

梵文『増一阿含』: *Ekottarāgama-Fragmente der Gilgit-Handschrift*. herausgegeben und bearbeitet von Chandrabhal Tripathi, I. Wezler, Verlag für Orientalistische Fachpublikationen, 1995.

AKBh : P. Pradhan ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

AKVy : U. Wogihara ed., *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, 山喜房佛書林, 1971(復刻版).

D. : sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka.

LA : *Lakṣaṇānusāriṇī* (ཆོས་མཛོད་ན་པའི་མཛོད་ཀྱི་འགྲེལ་བཤད་མཚན་ཉིད་ཀྱི་ཐེས་སུ་འབྲངབ་) by Pūrṇavardhana, Peking No. 5594, Derge No. 4093.

P. : Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka.

UV : Franz Bernhard ed., *Udānavarga*. Goettingen, 1965.

UVV : *Udānavargavivaraṇa* (ཆེད་དུ་བཟོད་པའི་ཆོས་ཀྱི་ནྟམ་པར་འགྲེལ་པ་) by Prajñāvarman, Peking No. 5601, Derge No. 4100.

T. : 大正新修大藏経.

TA : *Tattvārthā* (ཆོས་མཛོད་ན་པའི་མཛོད་ཀྱི་བཤད་པའི་བྱ་རྒྱུ་ཆེར་འགྲེལ་པ་དོན་གྱི་དེལ་ན་ཉིད་) by Sthiramati, Peking No. 5875, Derge No. 4421.

#### 参考資料

Balk, Michael

[1984a, b] *Prajñāvarman's Udānavargavivaraṇa: transliteration of its Tibetan version*, 2 vols., Indica et Tibetica, Bonn 1984.

[2011] *Untersuchungen zum Udānavarga: unter Berücksichtigung mittelindischer Parallelen und eines tibetischen Kommentars*, Indica et Tibetica: Monographien zu

den Sprachen und Literaturen des indo-tibetischen Kulturraumes; Bd. 53, Bonn 1988.  
Bernhard, Franz

[1965] *Udānavarga*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1965.

Hirakawa, Akira

[1973] 阿毘達磨俱舍論索引 = Index to the Abhidharmakośabhāṣya, Vol I, 大蔵出版, 1973.

Nakatani, Hiroaki

[1987] *Udānavarga de Subāṣi*, E. de Boccard, Paris, 1987.

Skillings, Peter

[1997] *Mahāsūtras: great discourses of the Buddha*: Vol. II. Oxford: The Pali Text Society (Sacred Books of the Buddhists XLIV, XLVI), 1997.

Schmithausen, Lambert

[1970] “Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ”, WZKS. 14, pp. 47-124.

池田練太郎

[1985] 「Candrakīrti『五蘊論』における諸問題」, 『駒澤大学佛教学部論集』16, pp. 588-566.

一色大悟

[2014] 「説一切有部アビダルマ文献における Śraddhā」『仏教文化研究論集』17, pp. 17-26.

印順

[1968] 『説一切有部爲主的論書與論師之研究』, 協林印書館(承印), 1968, 復刻, 『印順法師佛学著作全集』/ 第15卷, 中华书局, 2009.

瓜生津隆真

[1978] 「中観学派におけるアビダルマ一月称造『五蘊論』管見一」, 『三蔵集』3, pp. 185-192.

榎本文雄

[2001a] 「偈文の解釈研究」『真理の偈と物語(上)』大蔵出版, 2001.

[2001b] 「解説『法句譬喻經』覚え書き」『真理の偈と物語(下)』大蔵出版, 2001.

[2004] 「根本説一切有部」の登場」『インド哲学仏教思想論集』, pp. 651-677.

荻原雲来・山口益

[1934] 『称友俱舍論疏(二)』梵文俱舍疏刊行会, 1934.

小谷信千代

[1995] 『チベット俱舍学の研究: 「チムゼー」賢聖品の解説』, 文榮堂書店, 1995.

小谷信千代・本庄良文

[2007] 『俱舍論の原典研究 随眠品』大蔵出版, 2007.

真田康道

[1986] 「『無生法忍』の成立について」, 『人文学論集』, 20, pp. 1-16.

岸根敏幸

[2001] 『チャンドラキールティの中観思想』, 大東出版, 2001.

金敬姫

[2013] 「説一切有部における現観道形成の研究」, 龍谷大学, 博士論文.

久留宮圓秀

[1981] 「法華經のadhimkti」, 『大崎学報』, 134, pp. 1-22.

佐々木現順

[1958a] 「"khanti,kānti,kṣānti"」, 『印度学仏教学研究』通号13, pp. 37-42.

[1958b] 『阿毘達磨思想研究』弘文堂, 1958.

櫻部建

[1969] 『俱舎論の研究：界・根品』法蔵館, 1969.

[1975] 『仏教語の研究』文栄堂書店, 1975.

[1997] 『増補・仏教語の研究』文栄堂書店, 1997.

櫻部建・小谷信千代

[1999] 『俱舎論の原典解明 賢聖品』法蔵館, 1999.

櫻部建・小谷信千代・本庄良文

[2004] 『俱舎論の原典研究 智品・定品』大蔵出版, 2004.

清水俊史

[2015] 「説一切有部修道論における業滅の教理展開」, 『仏教史学研究』57 (2), pp. 1-21.

釋開仁

[2006] 「《雜阿含經》(788經)之正見増上」『福嚴佛學研究』1, 福嚴佛學院, 2006.

周 柔含

[2009] 『順決択分の研究』, 山喜房仏書林, 2009.

ソウチャイ, タン

[2003] 「説一切有部における邪見の概念--『俱舎論』『随眠品』を中心として」『仏教文化研究論集』7, pp. 58-84.

大正大学総合佛教研究所声聞地研究会

[1998] 『瑜伽論声聞地：第一瑜伽処』, 山喜房佛書林, 1998.

田中教照

[1975] 「阿毘曇心論系と大毘婆沙論の修行道論のちがいについて」, 『印度学仏教学研究』, 24-1, pp. 172-173.

[1976] 「修行道論より見た阿毘達磨論書の新古について」, 『仏教研究』5, 国際仏教徒協会, pp. 41-54.

田中裕成

[2015] 「『坐禪三昧經』の出世間道」『仏教学会紀要』20, pp. 125-146.

中村元

[1978] 『ブッダの真理のことは感興のことは』 岩波書店, 1978.

平岡聡

[2007] 「『出曜経』の成立に関する問題」『印度学仏教学研究』, 55-2, pp. 181-187.

平沢 一

[1985] 「聖諦現観における忍の働きについて」『印度学仏教学研究』 66, pp. 283-287.

舟橋一哉

[1987] 『俱舍論の原典解明 業品』 法蔵館, 1987年（新装版2011年）.

本庄 良文

[1989] 『梵文和訳決定義経・註』 民族社, 1989.

[1990] 「『釈軌論』第四章一世親の大乗仏説論（上）一」『神戸女子大学（文学部）紀要』 第23巻1号.

[2011] 「アビダルマ仏教と大乗仏教—仏説論を中心に—」 桂紹隆 編『シリーズ大乗仏教2 大乗仏教の誕生』 春秋社, pp. 173-204. （第二版にて一部訂正）.

[2014a] 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇 上』 大蔵出版, 2014.

[2014b] 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇 下』 大蔵出版, 2014.

水野弘元

[1981] 『法句経の研究』 春秋社, 1981.

三友健容

[2007] 『アビダルマディーパの研究』 平楽寺書店, 2007.

宮下晴輝

[1983] 「俱舍論註釈書 *Tattvārtha* の試訳 —第七章第一偈より第六偈まで—」『佛教学セミナー』 38, pp. 110-84.

横山剛

[2014a] 「中観派における Śraddhā の定義的用例：『中観五蘊論』に基づく訳語の検討」『仏教文化研究論集』, pp. 37-44.

[2014b] 「『牟尼意趣莊嚴』 (*Munimatālaṃkāra*) における一切法の解説」『密教文化』 233, pp. 100-74.

李学竹・加納和雄

[2016] 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 48r4-58r5) —『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説—」, 『密教文化』 234, pp. 120-83.